

21 世紀環境立国特別部会第 3 回にむけて

森本幸裕

(1) 戦略の基本理念、視点等

- ・ 温暖化が生物多様性の劣化を通して、環境変動が環境変動を呼ぶ計り知れない危機が迫っている。この危険性と実際に生起する可能性はミレニアムアセスメントの結果がよく示している。
- ・ 環境問題が部分最適、外部と未来へ問題の先送り、トータルな視点の欠如から発生したことを深く認識し、統合的・総合的視点を強調すべき。「美しい」景観＝ランドスケープの視点は俯瞰的、戦略的取り組みにとって有意義。省エネ省資源技術革新だけでは、限られた受益者の限られた地域の非持続的豊かさが生み出す温暖化や生物多様性の危機に対応できない。
- ・ 統合的に考える手がかりとして、(a)時間的視点＝次世代の幸せを考える、(b)空間的視点＝アジアを中心とした途上国のことを考える、(c)システム(生態系)的＝人間以外の生物のことを考える、があげられる。

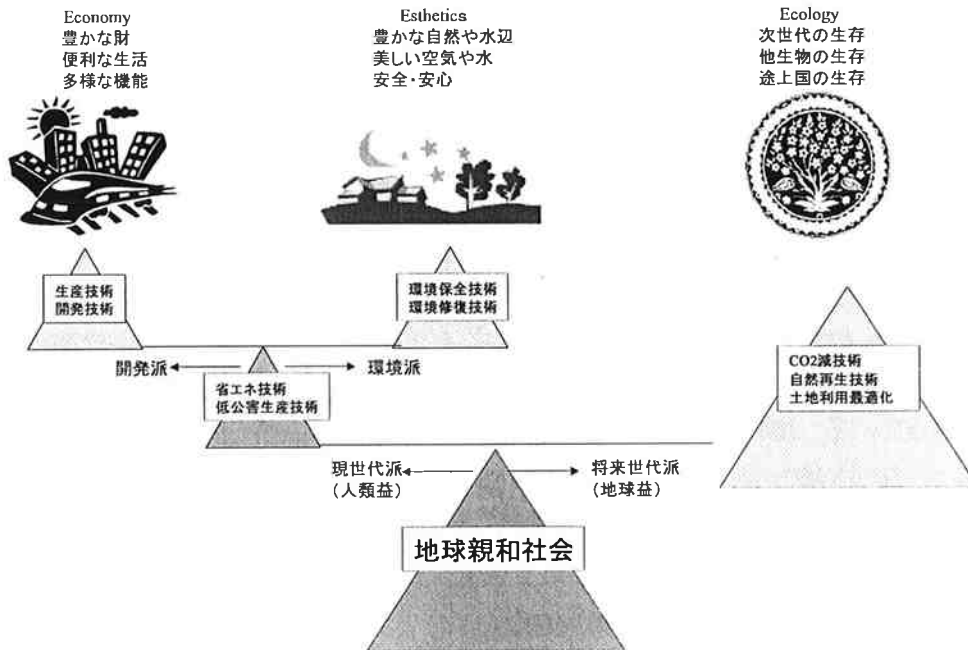


図 評価の二重天秤(内藤正明原図を一部改変)

- ・ 日本のもつ省エネ省資源技術と里地里山の持続的土地利用、国立公園など地域制自然公園のシステム等自然地のマネジメントシステムと自然再生技術などをベースに低炭素社会のゴールを共有する。

(2) 具体的な施策

(a)次世代育成の視点から：

1) 環境教育の大幅刷新：発達段階と社会に応じた環境教育と担い手、場所、 機会の担保

(コメント) 京都大学農学部新生で「砂漠の緑化」は「砂漠の自然破壊」であって、砂漠化防止緑化が課題であることを認識できている学生は稀。(アラル海の悲劇を参照のこと) 生物多様性が人類生存の基盤であることに気づかず、絶滅危惧種保全が趣味の領域とと思っている学生、「害虫は即皆殺し」の発想が天に唾する行為と気づかない学生が多すぎる。都市しか知らない日本の子供の自然観の歪がある一方、環境まで思い描けない状況にある社会も世界には存在する。日本では不思議と感動の生物親和都市—多自然居住の里地—奥山探索の自然地を舞台に。生きる力を養うための子供の環境国際交流など。

2) 国際的環境マネジメント専門家育成

(コメント) 環境の安全保障 (JICA 総裁の文書参照) の視点からの ODA の再検討のみならず、高等教育のレベルでも人材養成システムの構築が必要。

(b)アジアを中心とした国際的視点から

1) 環境情報の収集・予測・評価・共有

(コメント) 特に生物多様性関連について、生態系サービスや温暖化と関連付けた情報が不足。日本版 GBO で COP10 などに備えたい。

2) SATOYAMA コンセプトの発信

(コメント) 特に水田を中心とした里地里山文化の伝統を生かした低炭素社会のゆたかなありかたの提案がほしい。東アジア、モンスーン地域に特徴的な土地利用は、ミレニアムアセスでも生物多様性保全機能を通じた持続可能性が高く評価されている。環境・農林・文化・ODA などの協働により、地域からアジアレベルまでの持続可能モデル探求プロジェクトが必要。江戸時代の里山でなく、エコロジカルフットプリントに配慮したあり方のモデルの提示が課題。

(c)危機回避インセンティブを高める視点から

1) 環境指標、温暖化指標の開発と普及：ゴールとシナリオの検討

(コメント) 個人、世帯、地域、企業、地方、国の各レベルでの情報共有と例えば 2050 年低炭素社会への道筋への合意形成には権威ある評価基準が必要。

2) インセンティブ施策：

(コメント) 安全安心の食料と健康、CDM、ミティゲーションバンキング、希少種資源化はじめ、環境保全のインセンティブを高める経済政策の推進。

養老孟司

1 地球環境問題を検討するシステムについて

ー長期国家システムをー

○地球環境に関する長期的議論を行うには、これを検討する国家としてのシステム作りが大事。例えば旧貴族院のような、当面の利害に関わらない者が同じメンバーで、10年以上といった長期間、権威と調査権を持って検討を行うような組織・システムのイメージ。このような組織であれば、手弁当で参画してもらえるのではないか。

2 石油依存社会と食糧問題について

ー「エネルギー」、「食料」、「水」が重要ファクターー

○米国はヨーロッパ、アジアなど他の国々と違い、石油発見の後に文明が発展。国の社会経済システムが石油（及び石炭）に完全に依存。例えば、畑にスプリンクラーで地下水を撒き、物流にしても大型トラックが主流。すべて石油エネルギーでまかなわれている。

○今後、100年以内には石油依存社会を切り替える必要。莫大な石油依存のインフラやシステムをどう変更できるかが同国の鍵であり、そう認識されている。

○米国の文明の秩序は石油で保たれていると言っても過言ではない状況。これに対し、日本やヨーロッパ、中国などは、石油発見以前に石油に依存しない文明を築いた経験。ただし、インド・中国は、現在急激に石油依存型になりつつある。

○米国や中国など、世界の大規模灌漑農業では、今後100年から200年で水不足や塩害が起こることは必須。エネルギー不足も含め、いずれ行き詰まり食料危機となることが懸念。

○食料の世界流通にも莫大なエネルギーが使われており、食料とエネルギーは、現代では切り離せない問題である。また、今世紀は水不足が大きな問題となる。

3 環境を意識できる人間づくり

ー消費者から生産者へー

○日本において、国民が「生産者」から「消費者」に変化してしまった。（「消費者」とは、ものごとを商品の価値として捉え、短期的な判断を下しがちな人間）本来、教育や環境問題などは商品価値として捉えられるものではなく、長期的に判断していくもの。

○今の子ども達は、「消費者」としてまず、「商品」の価値を判断する。小学校で学級崩壊が生じているのは子どもが授業を「商品」としてしか見られなくなっていることに一因。授業が自分の「価値」にあわないと「辛抱」という貨幣を使うことを値切る。このような等価交換で物事を判断する「消費者」には環境の話をして通じなく、問題は解決しない。

○特に、子ども達を「生産者」にしていかないと日本の将来は危うい。このためには、一人一人が応分に自然とつきあわなくてはならない。子ども達に本当の田舎での自然体験をさせる必要がある。農業など生産者体験で自分が努力した結果が見える世界に放り込むことも大事。状況は異なるが、人体解剖を経験した学生はそれ以前とは見違えるようなしっかりとした人間になる。

○大人も神経をすり減らしており、自然の中で癒されることが必要。生活の場にも

森などの自然空間を取り入れることが重要。

- フランスのバカンスは政策的に導入されたが、国力が落ちるのではとの懸念の逆に、実際には国力が上がった。生産の総時間の減より結果的に質の低下を防いだことが重要。日本も現代版「参勤交代」（一定期間田舎に行くことを義務付け、里地里山の手入れを手伝う等）を行うべき。

4 生物多様性の危機

ー「参勤交代」で里山の「手入れ」をー

- 日本の自然の特徴は、森をよく残していることであり、自然の手入れの知恵とともに世界にアピールできるものである。欧米人は工業国でありながら森林の多い日本に驚く（イギリスの10倍の森林率）。管理されていない人工林が増えすぎてしまっており、「参勤交代」による手入れや一部を広葉樹に戻すことが必要。
- 日本は、入会制度という個人所有形態でない共同管理で代々里山をうまく利用しながら守ってもきた。現代的にアレンジできれば世界にアピールする知恵。
- 森林は今後、エネルギー、水、食料の供給源として重要性が増してくる。
- しかしながら、日本の自然も多様性が非常に減少している。昔は夏にはシシウドの花に虫が真っ黒になるほどついた。今では早春にも虫がいない。下肥を撒かなくなっただけで大きな原因（かつては循環と共生が成立）。
- 手入れをしないと維持できない「草原」に依存する虫も激減した。
- 特に、土壤微生物や大陸棚である沿岸域など、見えないところで生態系の劣化が非常に進んでいると考えられる。このような場所は科学的にも未解明であるが、国土の生態系の基礎を支える部分であり、重大な問題。調査研究を行っていくべき。沿岸漁業を復活させるよう資源回復を図っていくことが必要。
- 1台の乗用車が廃車になるまでに数千万匹の昆虫を衝突死させているという試算がある。人間がいかに自然に影響を与えているかを知るべき。
- 都市住民が自然環境に接し、関心を持つことが不可欠。里地里山の「手入れ」に参加し、都市と農山村の交流を深めること。これにより有機農業なども拡がり、自然にやさしい農業になっていく。

5 生物多様性のデータ整備

ー世界と比肩し得る標本ナショナルセンターー

- 国土の環境の状況を把握し、変化をキャッチしていく上で、生物情報の収集がまだまだ不足している。特に動植物の標本収集と整備の拠点となる、大きなナショナルセンターが必要。

6 地球環境問題の解決に向かって

- 人類は今後、エネルギー依存の社会を続けるのか、そうではない自然依存社会を目指すのか岐路に立たされている。地球温暖化や資源の枯渇に対し、代替エネルギーで全てまかなえろと考えるのは無理。
- 現代は様々なイデオロギーが失われてしまったが、人類が存続出来るよう地球生態系を維持して行くには、大きな価値観が必要。
- 基本的な目標、長期の見通し、長期戦略が必要であり、このためには徹底的な調査が必要である。